

Living and studying in Sweden

氏名	庄司鼓太郎
学部/研究科・学年（留学時）	理学部理学科・4回生
留学国名	スウェーデン
留学期間	6ヶ月
実施年月	2023年8月～2024年1月

1. はじめに

スウェーデン王国にあるウプサラ大学に約半年留学をしていた。スウェーデンは日本で、高負担高福祉の国というイメージを持たれていると個人的に思う。今回実際暮らしてみて、そうだなと思う点と、実際のイメージと隔離しているのではないかと思う点があった。また、本業である数学の勉強、研究を日本の大学以外でしたというのは、私にとって初めての経験であった。

2. 留学の動機と、なぜ Uppsala 大学なのか

留学の最初の動機はシンプルで、今まで一度も行っていない海外に行ってみたかったからというものだ。日本は世界的に見た場合非常に大きな国で、色々な事が日本で完結してしまう。それは誇らしいことではあるのだが、やはり日本という場所から一度外に出て学んでみたいという気持ちが強かった。留学を決意した理由としては、一度数学を日本以外でやる必要が自分の中で出てきたからだ。私は博士号をとることを直近の目標にしている。そこで、博士課程に進んでから国際的な研究の場に立つよりも、学士のうちに一度経験しておくべきだと考えた。そういうわけで、留学を決意したのである。

なぜスウェーデンなのか、なぜ Uppsala 大学なのか。この問いには現実的な回答をせざるを得ない。愛媛大学理学部の協定校として、選択肢は Uppsala 大学、Lund 大学(共にスウェーデン)、マルタ大学(マルタ)の3つしかなかった。その中で、数学をやる上で一番条件が良かったと思われた Uppsala 大学に決定した。



Uppsala 大学の、数学科があるキャンパス

3. 留学先での研究, 日常生活

数学科での授業は、簡単に言えば日本と全く同じ形式であった。日本の大学で行われている一般的な講義や、中高で行われているような先生が黒板を使って一方的に話すというものである。違いがないことには少し驚いたが、逆に数学の普遍性が垣間見えたようで面白いと感じた。スウェーデン語の講義も取ることができたが、忙しかったため選択していない。形式は同じといったが、多くの学生が講義途中でも質問している姿が印象的だった。日本でも発言は行われるが、より積極的だと言える。研究も Uppsala 大学での指導教員と一対一で行った。



講義室の様子

日常生活は非常に楽しい。私が住んでいたのは、主に留学生が住む学生寮だった。学生寮には共用部分としてキッチンと部屋のような空間があり、ルームメイトたちとホームパーティーをしたり、友人たちとアニメを見たりと色々楽しむことができた。

Uppsala 大学には、Nation と呼ばれる学生団体のようなものがある。そこではバーやクラブ、図書館などを運営しており、私もお酒を飲みに行ったり、夕食会に参加したりと、様々な交流を楽しむことができた。運営されているバーなどでは、お酒が比較的安く設定されている。Nation のメンバーになれば、そのような施設に入店することができる。

いろいろと楽しんだことを書いたが、大学の講義・研究以外で一番楽しかったのは間違いなく旅行だ。様々な国を旅行したが、中でも Swedish Lapland(スウェーデン北部)はとてもいい経験になった。北部とあってあまりに寒い過酷な環境なのだが、そこでも人々が“普通”の生活をしている様を見せられ、とてもいいショックを受けた。実際一週間ほど友人の実家(ちょうど空き家になっていた)で自炊をしながら生活したため、さらに現地の人に近い立場で寒い場所での生活を体験することができた。凍っている海を見る経験は、人生でなかなかないと思う。



凍った海

4. おわりに

留学を通して、半年間しか住んでいないのにもかかわらず、Uppsala とスウェーデンに愛着ができた。第二の故郷と呼んでも過言ではないくらい、土地に対しての愛がある。

Uppsala 大学での学習、研究を通して、英語能力、とりわけ英語で数学の議論をする力が著しく向上したことを実感している。能力が向上したことで、文献を読む速度が上がったり、英語での会話を楽しむことができるようになったりした。この貴重な体験は、自分の力だけでなく各所のサポートがあっただけでできたものなのだとことを忘れず、これからも精進

していく。最後に、ダーラナホースと呼ばれるスウェーデンの象徴的な像と、日本のだるま、日本とスウェーデンのよき組み合わせで締めようと思う。

